

2019年度 推薦入試前期B日程

2019年度 外国人留学生入試前期B日程

全学部共通 基礎科目【小論文】試験問題

時間 90分

学習のポイント

文章とは、筆者が考えていることを、読者に伝えるというコミュニケーションのための道具です。そして小論文試験とは、その道具をどのように使いこなせるのかを見るための試験です。課題文を正しく理解しているか、読者に伝えるために言葉を適正に使用しているか、記述は論理的に展開されているかなどが評価の対象となります。試験対策としては、日頃からまとまった分量の論説文・評論文を読む習慣をつけておくことが第一です。その際にわからない言葉があれば、必ず辞書を引いて意味を調べましょう。また、各段落が果たしている役割——問いを立てる、予想される反論に答える、結論を述べる、など——に注意して読むと、いっそう理解が深まるでしょう。そして読んだ文章の主旨について、自分で要約したり、それに対する自分のコメントをまとめたりすると有益です。論説文や評論文というのは、この「主旨」を読者に伝えるためのものだからです。文章にまとめる際には、接続詞を有効に使って、論理的に組み立てることを意識してみてください。

【問題】

次の文章は、長谷川宏著『幸福とは何か』（中公新書、二〇一八年）の一部です。文章を読んで以下の設問に答えてください。

アラン（二八六八～一九五二）の『幸福論』はけっして熱っぽくはならない、落ち着いた静かな語り口がなにより大きな特徴だ。

幸福が人間にとって大切なものであり、願わしいものであることは古今を通じて変わらない。しかし、文明の進歩や富の増大が人びとの暮らしを幸福なものにしたとは到底思えず、むしろそれによって幸福の本来のすがたが見えにくくなっている、とアランは考える。文明や富は幸福の源泉とはなりえず、場合によっては、幸福とは方向性のちがう欲望や熱情や名声へと人びとをかり立てる。必要なのは文明や富にまつわる欲望や熱意から身を引き離して、幸福の本来のすがたをきちんと見すえることだ。そうアランは考える。

では、幸福の本来のすがたとはなにか。アランの『幸福論』はそのすがたとそこに近づく道を身近な事例に即して具体的に語った九三篇の短文を一冊にまとめたものだ。幸福が穏な日常のうちにはさりげなくあり、ゆったりとした気分であらうべきものだと考えるアランにとって、幸福論の語り口もまた落ち着いた静かなものでなければならなかった。

心身の安定とゆとり

たとえば一九番目の短文「あくびの術」はこう書き出される。

暖炉のそばで犬があくびをすると、それが、あれこれ考えるのは明日にしなさい、という獵人たちへの忠告となる。なんの造作ぞうさくも気取りもなく伸びをするこの生命の力は、見ていて美しく、つい真似をしたくなる。居合わせたみんなが伸びをし、あくびをしないわけにはいかず、それが眠りの前奏曲となる。あくびは疲れのしるしではなく、内臓に深々と空気を入れることによって、注意と論争にのめりこむ精神に別れを告げる動作なのだ。この精力的な転換によって示されるのは、体という自然が生きることに満足し、考えることに倦き倦きしているということだ。

知性の人アランにあるまじき文章だと思ふ人もいるかもしれない。デカルトを師と仰ぎ、フランス風モラリストの一人として知と思考が暮らしに根づくところに人間の人間らしさを見るアランが、ここでは思考をむこうへと押しやるあくびの術を推奨しているのだから。が、アランは知や思考ならばどんなものでもよしとする人ではない。知と思考が外の世界と自由に行き来し、自分をも外界をも柔軟に多面的に考察の対象とすることを求めるのであって、内に引きこもり、あれこれと思い悩むことを好まない。知と思考の柔軟性と多面性は知と思考そのものにも向けられねばならないので、自分の内にこもり、自分に凝り固まった知と思考はおのれを失ったものとして厳しく批判されねばならない。

その批判が、いうならば体の自然な反応として生じたもの、それがあくびにほかならないとなれば、あれこれ思い悩むことよりも **A** といつてよい。

あくびは緊張や注意にたいする生命の復讐であり、健康の回復であって、あくびが伝染するのは、あくびがまじめさの放棄だからであり、のんきさを大っぴらに宣言するようなものだからだ。それは、整列の解散を告げる合図のように、みんなの待ちうける合図である。そうやって気楽になるのを拒否する人などいるはずがなく、あくびとともにまじめな気分は消えていく。

引用を重ねた短文の標題は「あくびの術」となっているが、あくびのしかたに一定の要領があると考えてアランはそんな標題をつけたのではあるまい。あくびはその場の空気と自身の心身の具合によって、なかば自然に出てくるものだ。まじめな人はなかば自然なそのあくびを嘔み殺そうとするし、人があくびをするのも快く思わない。それをアランは道に外れたふるまいであり、注2 狭隘きょうあいなものの見かたであると考え。場そのものを無用の緊張や必要な屈託おほが覆っているがゆえに、なかば自然にあくびが誘発されるのであって、そこではむしろ、伸びをし、あくびをして緊張を解きほぐし、屈託を逃れることが賢明だと考えるのだ。いまの引用であくびは **B** と呼ばれ、一つ前の引用ではあくびを引き出す力が「生命の力」と呼ばれていたが、心身に宿る生命が緊張を嫌い、ゆったりとした安定感を取りもどそうとしているとき、生命の流れに沿ってあくびを受け容れるのが人間の理性に

——知と思考に——かなうことだとアランは考えるのだ。

伸びをし、あくびをし、心身の安定とゆとりを取りもどす。そこに日々の暮らしにおける幸福の基本的構図を見てとろうとするのが、アランの幸福論だ。あくびといった人間の生活にとって理論上も実践上も些細な意味しかもたないしぐさと幸福とを結びつけるのは奇矯ききょうの感をまぬかれないが、アランに奇を銜てらう気はまったたくなく、伸びやあくびや、はたまた微笑ほほえみのような、さりげない動作やしぐさを無理なくくりだせる心身のありかたこそが、アランの幸福論の原点をなすものであった。

観念過剰、感情過多への戒め

そうした心身の安定とゆとりの対極にあるのが緊張、苛立ちいらだ、思い悩みであり、不安、恐怖、憎悪、悲しみ、悔恨、絶望である。気を許すと、そういうもろもろの不幸の種がすぐにも心身に芽生えてくる。アランが伸びやあくびや微笑を殊更ことさらに顕彰し推奨するかに見えるのは、人びとが無意識のうちに、また意識的に、不幸の種をかかえこみ、心身のうちに芽生えさせてしまうことへの思想的反撃という面が小さくなかった。

恐怖のなかには実みのりなき動揺以外になにもないし、思いに浸れば恐怖が増すばかりだと思う。人間は死を考えた途端に死が怖こわくなる。その通りだと思う。が、なにもしないで考えるとき、怖くないものがあるか。自分の考えがたんなる可能性の世界に迷いこむとき、なんだって怖くなる。試験のことを考えただけで下痢をすることがある。内臓が動くのを感じとって、剣先を突きつけられたと思う人もいよう。が、話がちがう。胃腸に火がついたのは、考えることなどないのにぐずぐず考える優柔不断のせいだ。

観念過剰、感情過多を戒める言だ。一九世紀末から二〇世紀前半のフランスに生きるなかで、アランはまわりの人びとの行動やふるまいのなかに観念や感情の肥大していくさまをいやというほど見ていた。産業の発達、都市への人口集中、衣食住の変化、生活の多忙化、規律・規制の強化、人づき合いの多様化、情報の量的拡大と質的細密化、等々、心身のゆとりや安定を突き崩し、人びとを緊張や苛立ちや神経過敏や情念の動揺へと導く社会の潮流

は文明の高度化と切り離しがたく結びついていった。

それを承知の上で、日々の暮らしにおいて、あくまでも心身のゆとりと安定を守りぬこうとする。それが C の眼目だった。

めまぐるしい状況の変化、生活の多様化・多忙化、情報の拡大のなか、過剰な観念や感情を容赦なく押しつけてくる世情に抗して、心身のゆとりと安定を守るには、そうした潮流から身を引きはがすようにして自分のもとへと立ちかえり、熱っぽい社会の動きの浅薄さと虚偽性を見ぬく必要があった。

注1 モーリスト・・・フランスの文学者のうち、特に人間の生き方を観察し、人間的な道徳のあり方を究めようとした作家の呼称。

注2 狭隘・・・心がせまいこと。度量が小さいこと。また、そのさま。

設問1

本文の空欄

A

B

C

に入るものとして最も適当な字句を

1～4より選んで記号で答えてください。

A

- 1 人間の人間らしさを見るほうが大切だ
- 2 多面的に考察の対象とするほうが知的だ
- 3 あくびのほうが知的だ
- 4 あくびの術を推奨するほうがましだ

B

- 1 生命の復讐
- 2 健康の回復
- 3 まじめさの放棄
- 4 みんなの待ちうける合図

C

- 1 知と思考
- 2 屈託を逃れること
- 3 アランの幸福論
- 4 さりげない動作やしぐさ

設問2

傍線部「幸福が平穏な日常のうちにさりげなくあり、ゆったりとした気分で近づくべきものだ」というアランの主張について、あなたの考えを六〇〇字以内で述べてください。論述にあたっては、本文に用いられている以外の身近な具体例に言及してください。